様式２

# 令和３年度　清瀬市立芝山小学校　　学校評価表

## 学校教育目標

公教育に携わる教職員としての職責を自覚し、一人一人が元気に輝き、確かな学力と豊かな心をもった自立する児童の育成を図るとともに、健康で安全な教育環境を整え、保護者・地域から信頼される学校づくりを目指す。

## 目指す学校像（ビジョン）

【目指す学校像】　子供の安全・安心を保障し、どの子にも居場所がある楽しい学校【安心】　保護者が安心して我が子を預けられ、保護者・地域とコミュニケーションを大切にする学校【信頼】　子供と共に学び、常にプラス思考で、教職員の専門性が発揮できる学校【充実】

【目指す児童・生徒像】　よく考え、それをやり抜く子　より明るく、みんなと仲良くできる子　そして強く、心身ともに健康な子

【目指す教師像】　職責を自覚し、個に応じた手立てをもち、他者からの助言を謙虚に学び、協働する教師

## 育成を目指す資質・能力及び特色ある教育活動

●自ら考え、進んで取り組む力=自学力　　●よく読み、よく書くための言語の力=言語力　　●他者とかかわる力=かかわり力
①言語能力の育成に重点を置いた学習指導の校内研究の推進（言語能力の実態調査、校長による音読教室、百人一首、国語辞典の活用　等）
②石田波郷俳句大会への参加と２年生から６年生までの全児童による俳句への取組
③低・中学年の読み聞かせや図書館活動の充実などの全校読書活動の充実
④特別支援教室（きらり教室）と担任との連携による特別支援教育の充実
⑤全校縦割りグループを生かした学年交流の取組
⑥学校支援本部を中核とした保護者・地域との連携と開かれた学校の推進

## 前年度までの学校経営上の成果と課題

・言語能力の育成を図るための研究授業を行うとともに、読書の励行、俳句の創作、音読・暗誦による語彙力の向上、国語辞典の積極的活用など、言語活動の充実に取り組んできた結果、児童の言語への関心が高まり、理解力や表現力の向上が見られるようになってきた。
・今年度は、改めて児童の言語能力に関する実態調査を実施し、言語能力にかかわる課題を客観的に把握した上で、言語能力の向上につながる授業改善の視点を明らかにして行く考えである。

| 柱 | 具体的方策 | 自己評価 評価 取組指標 | 自己評価 評価 成果指標 | 自己評価 課題及び次年度以降の改善方策（案） | 学校関係者評価 学校関係者による「自己評価」についての評価 | 次年度以降の改善方策 学校関係者評価の結果を踏まえた改善方策 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 確かな学力の向上 | ○学力の定着度を客観的に測定し、適切な評価を実施する。 | 4 | 4 | ○言語力の育成を校内研究の柱として、国語科を中心に指導の工夫を図り、実践を積み重ねた。算数科では、東京ベーシックドリルの診断テストを活用して一人一人の理解度を確認した。今年度は、カリキュラムの工夫として、『4年生の特別少人数指導「ﾍﾞｰｼｯｸﾀｲﾑ」』を実施し、全体の正答率が19%向上した。 | ・言語力は全ての学力の基礎となるので、言語力の育成を核に添えた教育は適切である。<br>・４年生の「ﾍﾞｰｼｯｸﾀｲﾑ」の成果は素晴らしいので、他の学年の実施もしてほしい。<br>・推進した内容と成果を具体的に知りたい。 | ・言語力の育成は、学校として育てる資質・能力の柱のひとつとして、次年度も継続して取り組んで行く。<br>・ﾍﾞｰｼｯｸﾀｲﾑの成果を踏まえ、取組を継続するとともに、基礎学力の定着を図っていく。 |
| | ○宿題や家庭学習の提示の仕方を工夫し、自ら学習に取り組む態度を育成する。 | 3 | 4 | ○宿題は全学級で毎日取り組めるようにしている。その取り組み方やチェック方法については、学年間で多少の差が見られる。自学力を育てるための自主学習は中学年以上で積極的に取り組み、保護者からも「主体的に学ぶ力が身に付く」と、約90%の肯定的回答があった。 | ・自主学習はとても大切な学習である。個々の取組姿勢にも配慮し、今後も充実させてほしい。<br>・自主学習について、計画的に進められている子供とどうでない子供の差があるとすれば、評価や成果を分析して、自主学習の内容について指導を充実させてほしい。 | ・学校として育てる資質・能力である「自学力」を取組の重点目標①　自ら課題を見付け、自ら課題を解決していく力の育成を目指す。その中で学年の発達段階や個人の興味関心に応じた自主学習を推進する。<br>・校内研究では、生活科・総合的な学習の時間の体験的な活動、探究的な学習を通して、主体的、協働的な学習を推進する。 |
| 豊かな心の育成 | ○毎学期にふれあいアンケートやふりかえりアンケートを実施し、その分析結果を活用していじめの早期発見に繋げる。 | 4 | 2 | ○今年度は、年3回のふれあいアンケートを実施して、いじめに限らず、児童の悩み事や困り事について、未然防止と早期発見に努めた。児童は95%の肯定的回答があったが、保護者は67%であった。「分からない」という回答が25%あったことから、学校での実態が分かりにくいことも考えられ、情報発信の工夫が必要である。 | ・ウィズコロナの教育活動や児童の学校生活について情報発信を今後も工夫していく必要がある。<br>・オンラインを活用した地域とのつながりなど、間接的に取り組めることも考えられるとよい。 | ・学期に１回の「ふれあいアンケート」や年間２回の「アセス」の目的やその分析に基づいた取組にいて、児童の実態を学校がどう把握し、教職員が具体的にどのように取り組んでいるかについて、丁寧に情報発信を行うことで保護者・地域の理解につなげる。 |
| | ○毎学期の挨拶運動の実施とふれあい班活動を計画的に実施する。 | 4 | 4 | 挨拶運動は、代表委員会の児童を中心に計画通り行うことができた。活動方法を工夫するなど、主体的に活動できたことは、全校児童の意識付けにつながった。ふれあい班は、感染症対策のために計画通りに実施することができなかったが、少ない回数の中でもできることを考え実施につなげた。 | ・「挨拶」はコミュニケーションの基本である。今後も児童の主体的活動とともに学校全体で取り組んでほしい。<br>・挨拶ができれば、いじめはなくなる。今後も続けてほしい。縦割りグループをもっと生かしていく。<br>・紙面アンケートだけでなく、対面の個々への聞き取りや日常の観察が大変重要でり、早期発見、未然防止に効果的である。<br>・以前に比べて、挨拶ができない児童が増えている。 | ・年間を通じて代表委員会を中心に全校的な挨拶運動を実施するとともに、教職員と児童、児童相互のコミュニケーションを大切にする指導を推進する。<br>・学年縦割り班活動による異学年交流を、異学年交流給食や集会活動等を活用して推進し、児童相互の親和的関係を醸成するとともに社会性や思いやりの心の育成を図る。 |
| 健やかな体の育成 | ○安全点検、安全指導、避難訓練を工夫・改善し、計画的に実施する。 | 4 | 4 | ○安全点検は計画的に行い、修理・改善が必要な箇所について迅速に対応できたことは、学校生活の安全につながった。避難訓練は、感染症対策を講じながら校庭に全校児童が集まって実施した。消防署との連携で、「消火器訓練」や「起震車体験」などを実施したことで、児童の避難訓練に対する集中力が高まったことでよい評価になった。 | ・感染予防対策や避難訓練は、児童が自分事として受け止め、真剣に取り組み行動できるようにしたい。<br>・今後も、消防や病院等、外部機関との連携を図り、積極的に活用していくとよい。<br>・消防署との連携とともに、学校外での避難行動ついても指導することが大切である。<br>・災害安全について、体験だけでなく理論も学べるとよい。 | ・毎月の安全指導日には、生活安全・交通安全・災害安全について実態に即した具体的な指導を行うことで、児童が自分事として考えられるようにする。また、「東京防災ブック」、「東京防災ノート」の活用やセーフティ教室及び薬物乱用防止教室を通じて、自他の生命の大切さを理解させ，安全指導の徹底を図るとともに、児童自身の危機回避能力を高める指導を充実する。 |
| | ○学級活動や体育の学習を通して、児童の健康・安全への意識を高め、体力の向上を図る。 | 3 | 4 | ○体育は感染状況に応じて計画を入れ替えるなど工夫をしつつ、実施することができた。休み時間（業間）の運動遊びも通常通り行えたことは、活動が制限される中で、健康体力の維持につながっている。オリパラ教育では、2年生と4年生で「なわとび教室」を実施した。2学年のペア学年で開催した「ふれあい運動会」は、保護者の皆様にもご観覧いただき、感染症対策を講じつつ、工夫して実施することができた。 | ・「業間の運動遊び」や「なわとび教室」など、児童が継続的に、目標をもって向き合える取り組みは体づくりにとてもよいと思う。<br>・個々の運動能力を伸ばす取り組みを工夫する。<br>・運動会の内容は、感染対策を講じながら、学年の発達段階も考慮して今後も工夫を凝らしてほしい。 | ・業間の運動遊びの実施や環境の整備に取り組む。また、体力テストの結果等を踏まえ、体育ＴＴと連携し、体育学習の充実により、体力の向上を図る。<br>・給食の時間を中心に、各教科等でも、食育の目標である「食事の重要性」「心身の健康」「食品選択」「感謝の心」「社会性」「食文化」について学んでいく。 |
| 特別支援教育の充実 | ○きらり担任と学級担任との連携を強化することによって、個に応じたきめ細かい指導の充実を図る。 | 2 | 4 | ○特別支援教室の担任と全教員の情報交換は週一回の職員夕会の時に行った。全教職員で情報共有することで、個に応じた指導について組織的に対応できた。学級担任との日常的な情報交換は、休み時間や放課後に行うことになるが時間設定としては十分ではなかった。特別支援教育について、保護者の理解が深まるよう、学校便りやHPを活用して周知していく。 | ・特別支援教育に関して、全教員が課題と対策を共有することが大変意義あることである。 | ・特別支援教育コーディネーターが中心となって校内委員会を定期的に開催し、学級での状況や特別支援教室「きらり」での状況について、学級担任と「きらり」の担当者が同席しながら情報交換を行い、連携を深めることで児童にとって安心できる学校環境を整える。 |
| | ○SCだより、SCと5年生児童全員面接、各相談機関の周知、個人面談の実施等、児童・保護者の相談できる環境を整えていく。 | 3 | 4 | ○年間10回を超える特別支援校内委員会は組織的計画的に実施することができ、関係者で共通理解を図った。SCによる5年生全員面接や年間を通した保護者面談の実施により、相談できる環境づくりに努めた。アセス（学校環境適応尺度）の実施が、学校全体の児童理解及び学級経営・専科経営に生かすことができるよう、今後も校内研修を行っていく。 | ・校内委員会や校内研修の積み重ねと合わせ、児童一人一人の成長につながっていると思う。 | ・年間３回の生活指導協議会において、各学級担任が配慮を要する児童一人一人について状況を説明し、全教職員で共通理解することによって、学校全体で課題のある児童に配慮する体制を構築する。 |
| 本校の特色 | ○児童の音読・暗唱活動を推進するとともに、俳句の創作に積極的に取り組ませる。 | 3 | 4 | ○今年度は全学年で俳句や川柳の創作活動を行った。音読集を活用した取組は、児童の意欲につながり、語彙が増えたり、表現力の向上につながった。また、校長室での音読発表や児童の俳句を学校便りで保護者に伝えてきたことは、言語力向上を目指す教育活動の理解につながった。しかし、感染症対策等から、年間を通して授業の中で十分に実践できなかった面もある。 | ・俳句や川柳の創作活動、音読集を活用した指導の積み重ねで、児童の言語力は確実に向上していると考える。今後も自分の思いを自由に表現できる子供たちを育ててほしい。<br>・オンラインでの授業など、間接的な取組を行う機関があってもよいと思う。 | ・清瀬の特色である俳句に親しむ活動について石田波郷俳句大会実行委員と連携していく。<br>・毎週全校読書の日の設定、中学年以上の辞書の活用等、各教科・領域等を通した言語表現の取組を大切にした指導を行う。 |
| | ○学校だより、学年だよりの他、学校ホームページ、学級だより、メール配信等で、学校からの情報を発信していく。 | 3 | 4 | ○今年度もコロナ禍での教育活動であったため、緊急な予定変更を含めて、教育活動について迅速な情報発信に努めた。保護者、地域の方々には来校していただく機会が少なかったため、教育活動を通した児童の様子については、ホームページの「校長室より」「花だより」「給食通信」等を通して伝えてきた。学年・学級だよりを活用して児童の様子を伝えることについては、来年度もさらに充実させていきたい。 | ・学校からの迅速で丁寧な情報発信は、学校への信頼を高める。今後もさらに充実させていってほしい。<br>・保護者や地域関係者が学校に行く機会が減っているので、ホームページでの情報発信により、学校の様子を知ることができるのは、とても嬉しいことである。<br>・情報発信が増えて、学校の様子がよく分かるようになった。相互に意見交流できる場あるとよい。 | ・保護者・地域と連携していくために、学校・学年の取組の様子について、可能な限り、広く公開していく。<br>次年度も、ホームページ「校長室より」の週１回程度の更新や感染症対策を講じながら、直接参観できる機会を設けて、教育活動及び児童の様子を伝える。 |